

【解説】

天帝の娘である機織の織女と、夫となった牛飼いの牽牛は、真面目に仕事をするという条件で、年に一度、二人の逢瀬を許すという中国の伝説がある。天帝は二人を天の川の兩岸に引き離し、旧暦の七月七日の夜に織女は牽牛に会いに天の川を渡ると云う。それが七夕の物語である。

日本では織女を織姫、牽牛を彦星と言ひ、逆に彦星が織姫のもとへ天の川を渡る。この川には橋が架かり、その橋は「鵲橋」と呼ばれているが、七夕の日は新暦では八月上中旬であり、木々が色づくにはまだ早い。しかし、小唄「紅葉の橋」の季節は秋ではないか。その疑問は、諸兄が夏の夜空と秋の夜空の両方を仰ぎ見れば、解けるであろう。

夏の夜空に織姫の星と彦星の星を探すのは容易い。白鳥座のデネブ、鷲座のアルタイル、琴座のベガを三星として「夏の大三角」を成す。それぞれ一等星で明るく輝き、デネブを三角形の頂点として、底辺に向けて二分する線分の方向に伸びるのが天の川である。その構図を夏空と秋空に探そう。夏は織姫と彦星が逢瀬を遂げる、生き生きとした季節である。

夏が過ぎて、秋はどうか。次の逢瀬まで1年を待つのである。その寂しく切ない思いを哀れに思い、秋の天の川を渡してやろうというのが、「紅葉の橋」なのである。誰が手助けをするのか。



それは鵲であり、羽を広げてその上を渡してあげるといふ設定と、鵲が赤い紅葉の葉を天の川に敷き詰めて橋と成し、その上を彦星が渡ってゆくという設定もある。冷たい秋の夜空がそういう感傷を誘うのである。

かささぎの渡せる橋におく霜の

白きを見れば夜ぞ更けにける

(大友家持 小倉百人一首6番)

万葉の歌人である家持の歌を詠めば、「紅葉の橋」作詞者の河竹黙阿弥が何故にカササギという鳥をモチーフに入れたかが解る。

更け行く晩秋に、天の川は霜が降ったように、夜空の一角に白く輝く。この季節感が故事を生んだ七夕の夏から、紅葉が散る秋の感傷を生み出す。

カササギが天の川を渡すという故事は、「淮南子」という前漢時代の思想書からの、左記の引用である。

烏鵲填河成橋 而渡織女

(烏鵲 河を填めて橋を成し 織女を渡らしむ)

因みに、烏鵲とはカチガラス(カササギ)のことで、佐賀では「勝ち鳥」と言っ、縁起の良い鳥である。